

詩に語られた「現代史」

——俞德鄰「京口遺懷」張彥明 劉伯宣郎中并びに
諸友に呈す「百韻」に見る歴史敘述——

稻垣裕史

京都大學

一 はじめに

詩という文體に歴史が綴られるのは、いつの頃からだろう——ここでいう「詩」とは、作者の明らかな魏晉以降の詩であり、「歴史」とは同時代史のことである。文人が自己の日常を詩にうたうとき、程度の差こそあれ同時代史的事象が必ず反映されるものだが、それらを歴史敘述と呼ぶことはできない。事象が断片的で體系化されておらず、また作者に同時代を書き留めようとする意圖がないからだ。かりに意圖的に書き留めていたにせよ、それは断片的な

「記録」であつて歴史敘述ではない。歴史敘述とは、歴史事象を再構成して語り直したものである。史家は様々な記録を用いて事象を體系化し、みずからの言葉で歴史を語り直す。偶然に反映された歴史性と、意圖的に書き留められた記録、それらを史料として語り直した歴史敘述は、それぞれ區別されなければならない。

詩に限定せず、賦にまで視野を広げるならば、同時代史と呼びうる作品に北周・庾信「哀江南賦」、北齊・顔之推「觀我生賦」がある。すでに多くの研究があるように、「哀江南賦」は序において「楚歌は樂しみを取るの方に非ず、魯酒は憂ひを忘るるの用無し」と、いわゆる「郷關の思」を主題に匂わせつつも、賦本篇では同時代の政治史を中心に敘述している。それは當時における「現代史」と言い換えてよからう。^①一方、詩による「現代史」敘述を文學史の主流から見つけるのは難しいが、奇しくも庾信や顔之推のごとく王朝交代の混亂期を生きた宋末元初の文人、俞德鄰（一二三三—一二九三）がそのような長編敘事詩を残している。ここに論ずる「京口遺懷」張彥明 劉伯宣郎中并

びに諸友に呈す「一百韻」(『佩韋齋文集』卷二、以下「京口遣懷」詩)である。

宋末における長編敘事詩の例として、錢鍾書『宋詩選註』は汪元量「湖州歌」九十八首とともに俞德鄰「京口遣懷」詩を擧げている(「汪元量」解題)。俞德鄰は史家ではないし、卓越した詩人でもない。しかし、宋末を實地に體驗した讀書人による編年體の歴史敘述、しかもそれが詩として書かれているとすれば、文學史上看過することはできないのではないか。現存する唐人の「一百韻」詩は、杜甫「秋日夔府詠懷」鄭監、李賓客に奉り寄す「一百韻」(杜詩詳註)卷一九を嚆矢とし、劉禹錫・元稹・白居易・李商隱・皮日休・陸龜蒙・韋莊などの作が傳わっているが、「一百韻」という形式に歴史敘述の系譜は見いだし難い^②。また、宋初の王禹偁に「一百六十韻」および自傳的な長編詩(「謫居感事」、「小畜集」卷八)があるが、自傳から距離を置いて「現代」を物語る作品は類例に乏しいように思われる。

二 「現代史」の作者と讀者

まず作者俞德鄰と、詩題に見える人物について傳記を確認しておこう。

(a) 俞 德 鄰 (一一三二—一二九三)

俞德鄰の傳は『至順鎮江志』卷一九、人材部・隱逸・僑寓の項に見える(括弧内は筆者注)。

俞德隣、字は宗大、永嘉の平陽(浙江平陽)の人。宋の寶祐中、父卓 廬江(安徽廬江)令と爲りて、京口(江蘇鎮江)に僑寓し、因りて焉に家す。景定辛酉(二年、一二六一)、『書經』を以て郷舉に魁す。咸淳癸酉(九年、一二七三)、『禮記』を以て浙漕に魁す。歸附の初、阿朮丞相^{アジュ} 辟して行省郎中と爲すも就かず。行大司農・司江浙行省、累ねて薦むるも皆な起たず……西阜の趙公文昌(趙葵)、贈るに詩を以てして曰く……。卒年六十有二。自ら太玉山人と號す。『佩韋文集』十六卷、『輯聞』四卷有り。紫陽(安徽歙縣)

の方公回、建安（福建建甌）の熊先生禾、之の序引を爲り、世に板行す。弟西發。子四人、庸・虞・希魯・康。

俞德鄰の傳記は不明な點も多い。本論に關わる事項について以下に考證しておく。

（イ）學 歴

宋・熊禾は俞德鄰を咸淳九年の進士としており（『佩韋先生文集序』、『佩韋齋文集』卷首）、後に作られた傳記資料（近年では祝尙書『宋人別集敘錄』など）もこの記述に従うが、上に引いた『至順鎮江志』は浙漕（兩浙轉運使の管轄する貢院）における漕試（解試に相當する）について言及するのみで、のちの省試の可否について觸れていない。熊禾が「進士」と記したのは儀禮的な修辭であり、實際には明・宋濂「俞先生（希魯）墓碑」（『芝園續集』卷五、『宋學士文集』卷六五）に明記されるところ、「鄉貢進士」であつたと考えられる。南宋最後の科擧は咸淳九年から翌十年にかけて實施され、殿試は二度にわたる延期の後、咸淳十年（甲戌、

一二七四）七月頃ようやく實現した（『宋史』卷一五六選舉志二）。『佩韋齋文集』を繙くに、俞德鄰は同年六月に杭州を離れており（『甲戌遊盱江六月二十一日發武林』詩、卷二）、殿試に應じた形跡はみとめられない。『至順鎮江志』の編者は俞德鄰の子、俞希魯であるから（清・劉文洪『至順鎮江志』校勘記）、同書が俞德鄰の最終學歴を明記しないのは父への配慮と思われる。

（ロ）交 際

咸淳年間、俞德鄰には政府高官の一人であつた黃萬石（生卒年不詳）との繋がりが認められる。俞德鄰に「壽沿江黃制置」七首（卷二）があり、その副題に「咸淳壬申（八年、一二七二）の作、故書を閲して偶たま之を見、昔日賓閣に陪從するの舊を追感するに、刪去するに忍びず、凄然として名節の保ち難きを恨み、時偶の過え難きを歎く也」とある。詩は咸淳八年の作、副題は後年の追記である。『宋史』によれば、咸淳八年當時、沿江制置使の任にあつたのは吳革（咸淳五年三月に辭令、六年五月に沿江制置宣撫使

となる）、副使は夏貴（咸淳四年十二月に辭令）であり、前任者に黄姓は見いだせない。兪德鄰のいう「沿江黄制置」は、

おそらく咸淳六年九月、沿海制置使となり、同九年五月、

權戶部尚書兼知臨安府となるまでの任にあった、黄萬石であろう。③「壽沿江黄制置」詩の副題で「名節の保ち難きを恨む」のは、

德祐二年（一二七六）五月、黄萬石が元朝に歸順したためである（『元史』世祖紀六）。宋濂「兪先生墓碑」は兪德鄰と黄萬石の關係に觸れていないが、兪氏の系譜を記すにあたり、いわゆる「貳臣」であつた黄萬石を避忌した可能性は十分に考えられる。

また、兪德鄰の文集には他人のために起草した代筆表箋が多數收録されており、なかでも黄松岡なる人物のための代筆が多い。「賀生皇子表」（卷二三、原注「戊申」、咸淳四年十月に生まれた度宗の皇子、憲を指す）などがそれであるが、この黄松岡もまた黄萬石ではなからうか。黄萬石は史傳にその字號が見えないが、「萬石」と「松岡」は名・號の組み合わせとして不自然ではなく、また表箋の奏上を許される者は相應の身分でなければならぬからだ。

詩に語られた「現代史」（稻垣）

（八） 文 集

『至順鎮江志』に記されるごとく、かつて兪德鄰の別集には『瀛奎律髓』の編者として知られる方回の序があつた。これより後に作られた熊禾の序（前出、皇慶元年作、一三一一）にも、「紫陽の方侯、亦た文名を以てし、公と交游すること最も久し。嘗て公の集に序し、其の遺事を載すること、傳を作るが如く然り。且つ能く晩節を保つを以て、而して之に心服す」と記されている。方回の序は現存する元刻本に附されず（天祿琳瑯叢書第一輯所收元刻本は『文集』十六卷に『佩韋齋輯聞』四卷を合わせた二十卷本、本稿に引く兪德鄰の詩文はこれを底本とする）、『四庫提要』（卷一六五）は方回の變節を嫌つて刪去したのであらうと述べている（四庫全書本の底本は湖北巡撫採進十六卷本、『提要』及び『四庫採進書目』参照）。

方回の序は、彼の『桐江集』八卷、『桐江續集』三十六卷に收録されず、『全元文』（第七冊）の佚文にも見えない。さらに言えば、兪德鄰と方回いずれの別集にも兩者の關係

を窺わせる詩文は見いだせず、熊禾のいう「交游すること最も久し」い關係は認められない（ただし『桐江集』には詩が收められず、『續集』には殘闕が多い）。『桐江集』を繙けば氣づくことだが、當時方回の文名を慕つて序跋を依頼する人士は多く、俞德鄰の息子もその一人であつたかもしれない。たまたま「其の遺事を載すること傳を作るが如く然る方回の序文を読んだ熊禾にとつて、兩者の關係が親密に思われたというのは十分にあり得るだらう。ともあれ、いわゆる「遺民」である俞德鄰と、「貳臣」にあたる方回との間に何らかの接點があつた事實は注意しておいてよい。

(b) 張 焯（一二三五—一二八八）

張焯、字は彥明、『元史』卷一七〇に傳があり、俞德鄰より七歳年長である。父は濟南の商人で、焯ははじめ故郷の補吏であつた。中統元年（宋景定元年、一二六〇）、中書省掾となつた後は各地を轉々とし、至元十一年（宋咸淳十年、一二七四年）、淮西等路行中書省左右司郎中として軍用物資の補給に當たる。至元十三年（宋德祐二年、一二七六）、

揚州攻略戰の功により揚州路總管府達魯花赤となり、同十五年（『元史』は十六年）に鎮江府總管府達魯花赤となる。『至順鎮江志』卷一五、元刺守の項によれば、鎮江府での任期は至元十五年十一月から同十六年五月であり、同府に住む俞德鄰と交際したのはこの頃であらう。その後歸郷し、八萬卷の書物を濟南の府學に寄贈したというが、かなりの藏書家であつたらしく、俞德鄰「濟南張氏萬卷堂記」（卷九）には彼の收集癖が記されている。

(c) 劉 宣（一二三三—一二八八）

劉宣、字は伯宣、『元史』卷一六八に傳があり、俞德鄰よりも一歳後輩である。早くから元朝に仕え、至元十二年（一二七五）に中書戸部郎中、のち行省郎中に移り、翌年の江南平定後、知松江府となる。俞德鄰に「送劉伯宣尹松江府五首」（卷五）があるように、兩者の交際は宋の歸順以前か、遅くともその直後に始まっている。まもなく同知浙西宣慰司事として五年間つとめ、のち江西湖東道提刑按察使となる。俞德鄰「送劉伯宣尚書序」（卷一〇）に「太原

の劉公 江右に亭刑するの二年」と記されることから、提刑按察使としての任期はおよそ二年間であった。至元二十三年（一二八六）に禮部尙書、のち吏部尙書を経て、二十五年に行臺御史中丞となる。このとき江浙行省丞相の忙古臺と折り合いが悪く、誣告されて自殺している。元朝の地方高級官僚であった劉宣は學問にも熱心であつたらしく、本傳に「暇なれば則ち往きて國士祭酒許衡に従い、理學を講明す」とあり、のちの『宋元學案』（卷九〇）では許衡の魯齋學案に名を連ねている。なお、劉宣は俞德鄰の別集に序を書いた方回と交際があり、方回到「寄劉伯宣南昌」詩（『桐江續集』卷三）、「寄伯宣尙書士常吏侍」二首（卷二）、「喜劉伯宣尙書至」五首（卷一三）などが傳わっている。

三 詩に語られる宋末史

「京口遺懷」詩は宋元詩の代表的な選集に採録されていない。後世、俞德鄰の詩文は宋の遺民の著作としてのみ關心を引いたようで、『宋百家詩存』（乾隆五年）卷三八に一百九篇（連作詩も一篇と數える）が收録されるほかは、『宋

詩紀事』（乾隆二十一年）卷七六に詩七篇、『南宋文範』（道光一七年）卷一八・三〇・六二に文一篇ずつが採られるにとどまる。卑見によれば、清代の宋詩選集は再發見された宋人の作品を積極的に收録する傾向にあるから、『宋百家詩存』の收録數は俞德鄰の知名度をそのまま示すものではない。^④

「京口遺懷」詩は五言古詩で入聲屋韻（獨用）と沃・燭韻（同用）を通押し、韻字は『禮部韻略』の收録字彙にはほとんど一致する。詩の作成年は、劉宣が同知浙西宣慰司事、張炤が鎮江府總管府達魯花赤の任にあつた至元十六年（一二七九）頃に比定できる。^⑤張世傑・陸秀夫ら宋の殘存政權が消滅したその數ヶ月後、俞德鄰四十八歳の時に作られたことになる。

（a）共有された「現代史」認識

詩の歴史敘述を整理すると稿末の〈表〉のようになる。宋末史の敘述は第一段から第四段、すなわち第七句から第一五四句まで、全篇のおよそ七割を占めており、開慶元年

(元憲宗九年、一二五九) 九月の元軍による鄂州進攻、いわゆる「開慶兵禍」を上限とし、至元十六年(一二七九)二月の厓山における殘存政權消滅を下限とする。

〈表〉から明らかなように、詩に語られる歴史事象は正史や筆記にほぼ例外なく記事を発見でき、一部の人間のみ知りうるような特殊な事件には言及されていない。筆者の考證が正しければ、詩は厓山の殘存政權消滅後、間もなく作られているから、既成の史書を參考にした可能性は極めて低い。にもかかわらず、語られた歴史事象がことごとく史書に符合する點にこそ、この詩の特異性がある。

詩と史書の記事がほぼ一致するという事實は、當時の讀書人がある一定の「現代史」認識を共有していたことを示唆してはいまいか。はじめに述べたように、歴史敘述とは史料を再構成した二次創作であるが、史料の取捨選擇と再構成をつかさどるのは書き手の歴史觀に他ならない。それは多くの場合個人の創見ではなく公論にもとづいて形成され、同時代人の間で共有されたものである。愈徳鄰はおそらく、そのような共有された「現代史」認識に基づいて歴

史敘述をしており、一部既存の文字資料を參照したにせよ、自己の體驗、見聞、記憶を有力な「史料」にしていたと思われる。ならば、「京口遺懷」詩には當時の江南讀書人が共有していたであろう、史書にまとめられる以前の、ごく早い時期の宋末史認識があらわれていると言えるのではなからうか。

(b) 正史の筆法

正史の歴史敘述は、大きく分けて歴史事實を述べた敘事の部分と、史官の歴史批評である論贊によって構成されているが、「京口遺懷」詩はこうした正史の筆法を意識している。その態度はすでに詩のまぐらに表れている(詩句に附したアラビア數字は句の番號、括弧内は詩の大意)。

005 借問誰厲階 借問す 誰か厲階なる

006 往事具可復 往事 具に復すべし

(さて問うてみたい 誰が災いの發端であつたか、昔の事をこまかに振り返ってみよう)

この一聯のあと、編年體による歴史敘述が始まる。「往

「事」をこまかに振り返るのは敘事、政治の得失を問いただし、禍を招いた「厲階」を突き止めようとするのは歴史批評と、それぞれ言い換えることができる。

敘事と批評の具體例として、賈似道執政期の敘述を取り上げる。宋末史前半の主人公である賈似道を、語り手は華やかに登場させている。

- | | | |
|-----|-------|--------------|
| 019 | 惟時望公閭 | 惟れ時に公閭を望めば |
| 020 | 高譽擬方叔 | 高き譽れは方叔に擬ふ |
| 021 | 邁歸持相印 | 邁やかに歸りて相印を持ち |
| 022 | 景定實初卜 | 景定 實に初めて卜す |

(ときに朝と野を見渡せば、かの人物の名聲は北伐に功のあつた周の方叔のごとし／中央に取つて返すや宰相となり、「景く定まる」という元號がそこで初めて選ばれた)

當時樞密使として京西・湖南北・四川方面の軍事を擔つていた賈似道は、鄂州の役を收拾するため前線より召還され、右丞相兼樞密使として文武兩權を掌握する。兩權を委譲されるや幾月も経たぬうちに元軍を撃退した彼の活躍は、その實際はどうあれ、前線に疎い皇帝と朝政官の眼には頼も

しく映つたであろう。詩はその後きらびやかな凱旋のさまを描寫しているが、節の終わりにいたつて、次のような批評が挿入される。

- | | | |
|-----|-------|----------------|
| 029 | 焉知事夸毗 | 焉んぞ知らん 事の夸毗にして |
| 030 | 欲擯天下目 | 天下の目を擯はんと欲するを |
| 031 | 得政曾幾何 | 政を得ること曾て幾何ぞ |
| 032 | 故老盡斥逐 | 故老 盡く斥逐せらる |
- (思いもよるまい 言葉巧みな阿りで、天下の目を欺こうとしていたとは／閣僚となつても長續きはしない、古株はみな排斥されてしまった)

敘事の間に挿入される語り手の批評は、正史でいえば史臣の論に相當するだろう。語り手は賈似道の華々しい凱旋について語つたあと、以上のような短い批評を差し挟むことで、政治の裏側を示唆している。

歴史敘述をひとつの物語として見た場合、敘事の間に挿入されるこのような批評は、次の節を圓滑に語り起こし、物語をより劇的に演出する伏線の役割を兼ねている。つづく一節では先の批評を伏線とし、政治の表と裏を交互に對

比させつつ語ったあと（第三十五—四十六句）、やはり批評によつてその後につづく一大事件、襄陽の陥落をはのめかしている（第四十七・四十八句）。

正史の模倣については、兪德鄰自身が詩のむすびのなかで觸れている。

- 189 安得董狐輩 安にか得ん 董狐の輩の
190 直筆濡簡牘 直筆もて簡牘を濡らし
191 誅姦錄忠盡 姦を誅して忠盡を録し
192 上與麟經續 上は麟經と續くを

（どこかにおらぬものか いにしえの董狐のごとく、ありの

ままの事實を簡策に書きつけ／奸臣に筆誅を下して忠臣を顯彰する、そのかみ『春秋』の系譜に連なるような良史は）

ことばの表層では、『春秋』の傳統を繼ぎ、政治の得失を正しく記録する、優れた史官の出現を期待するにとどまる。しかし、詩の大半を敘事に費やし、また批評によつて政治の得失を「直筆」している事實を顧みれば、良史への期待は、作者自身その代役を務めたことの逆説的表現として理解できる。

正史の模倣は第五段に最も顯著に表れている。太祖の即位から靖康の變、南渡から王朝の滅亡にいたる、宋朝三百年の政治史を概括するこの一段は、正史卷末の論贊と同じ役割を與えられているだろう。第五段は「淒涼たり數載の間、王侯は半菽すら乏し。九廟は蒿藜に翳り、五陵に豕は遊ぶ。向來 闐闐の地、雨露は首蓓を滋す」（第一百七十七—一百八十二句）と、没落した皇族、荒廢した宗廟と陵墓、いわゆる黍離の歎をもつて締めくくられ、ここにおいて詩における歴史敘述のすべてが終了する。

（c） 人名と人物評價

まぐらの「借問す誰か厲階なる」、むすびの「姦を誅して忠盡を録す」に端的に示されるがごとく、「京口遺懷」詩の歴史批評は人物の正當な評價に主眼が置かれており、とりわけ元朝に歸順した文武の官に對して嚴しい。以下は、新たな王朝のもとで職を得た宋の舊臣について述べた一節である。

117 彼哉寧馨兒 彼ならん哉 寧馨き兒

118 乘罇叨爵祿 罇すきに乗じて爵祿を叨かじけくす

119 屈膝同所歸 膝を屈して歸する所を同じくし

120 伊誰念王蠋 伊れ誰か王蠋を念おもはんや

121 江湖數十郡 江湖 數十郡

122 李趙差可錄 李趙 差はんんど錄す可し

123 元惡迷是似 元惡 是似に迷い

124 萬世有餘惡 萬世に餘惡ちく有り

(彼や彼 やつらとくれば、綻びに乗じて爵位と扶持を頂戴する／ひざまづいて一つ所へ歸順し、さて誰が幼き帝を氣に掛けよう／江南數十郡の土地には、おおむね李斯や趙高のごとき奸賊が官僚として名を連ねている／國を滅ぼした大罪人は見せかけの正しさに惑い、萬世に恥辱を残す)

かつて俞德鄰が知遇を受けた黃萬石、また「交游すること最も久し」といわれる方が、語り手のいわゆる「寧馨かたのこき兒」(第一百十七句)であるのは興味深い事實である。^⑥

人物評價の態度は人名の使用法にも表れている。詩が歴史敘述である以上、人名への言及は避けられない。史書のごとくそのまま姓名を記しては詩として成立しないため、

俞德鄰は人名の使用に相應の工夫をしている。

063 老夏亦遁逃 老夏 亦た遁逃し

064 竟學龜藏六 竟ひに龜藏六を學ぶ

「老夏」は、軍人として宋末史に名を残す夏貴を指す。當時の筆記に、「惜しむらくは天使李公(庭芝)怯えて敢えて進まず、而も夏老、淮東と薄いさか嫌隙有れば、合從するを得ず」(文天祥『指南錄』卷三「議糾合兩淮復興」とある。

これは苗再成という軍人の發言を書き取ったものであるが、この例を見るに、「夏老」ないし「老夏」は當時非公式の場でささやかれていた夏貴の呼稱ではなかったか。いずれも公式にはふさわしくない呼稱であるから、いくぶん侮蔑の意味合いが込められているよう。これとは對照的に、忠臣として名高い文天祥と陸秀夫については、以下のように姓に肩書を加えた敬稱が用いられている。

147 旋聞俘文相 旋たちまち聞く 文相とら俘となり

148 繫頸繫燕獄 頸を繋ぎて燕獄に繫とらへらると

149 又聞陸元樞 又た聞く 陸元樞

150 抗節死彌篤 節を抗とらぐることに死するに彌い篤

しと

諱をそのまま記す必要がある場合、一般語彙としても讀める工夫がなされている。例えば、丁大全の失脚を受けて起用され、士大夫の人望を集めていた吳潛は、「明詔臣潛を起こし、顛^{たふ}るるを扶けて鈞軸を乗らしむ」(第十五・十六句)と記される。この句は「臣の潜^{ひそ}めるを起たしむ」とも讀めるように、沈潜^{ちんせん}していた人物を拔擢する意味が與えられている。また、丁家洲の役で賈似道から總大將を任された孫虎臣は、「總統虎臣^{あつ}に付へ、竊かに晉の卻縠^{しやくこ}を倚^{たよ}む」(第六十九・七十句)とある。詩はこの後「丁洲に前鋒を帥ゐるも、未だ戦はざるに兵は已に衄^くく」と續くことから、「虎臣」(もと『詩經』大雅常武、魯頌泮水の語)という勇ましい名前はこけおどし、戦う前からおっかなびっくり、といった揶揄^{げぎやう}の効果をねらっているのだろう。「謹傳して宜中^{いしん}を用ひ、厦^かの仆るるに一木もて支へしむ」(第八十一・八十二句)の陳宜中、「獨松の守張濡^{しやう}、兒戲にして蠻觸に闘ふがごとし」(第一百三・一百四句)の張濡なども、いささか穿った見方かもしれないが、「宜^よしく中^{あた}るべく」もない

陳宜中が丞相となり、ぐずぐずと濡滯する張濡が守將を任されたと解釋できる。

また宋末史敘述の冒頭には、「穆陵乾符を握り、丁揆鼎鍊を覆す」(第七・八句)と、當時の宰相丁大全を指す「丁揆」が用いられている。これは元軍の鄂州進攻、いわゆる「開慶兵禍」について述べており、史書に「開慶の禍、丁大全に始まる」(『宋史』瀛國公紀、德祐元年六月丙午、王應麟の上書)とあるごとく、事件の責任を彼に歸するのは當時の公論であつた。その一方、宋末史の最重要人物であり、詩前半部の主人公でもある賈似道については、その死を語る段にいたつても姓名字號が示されない。むろん當時の讀者にとつては周知の事實であり、とりたてて記す必要もないのだが、王朝の歸順を語り起こす段になつて、はじめて彼の姓を示唆する語が現れる。

105 信使詭成禽 信使 詭^{いつは}りて禽と成り

106 賈禍幾覆族 禍を賈^かひて幾んど族を覆す

「賈禍」は『左傳』定公六年にみえる「禍を招く」という意味の語。ここでは商いの意味の「賈^か」と賈似道の「賈^か」

が、かけこばいになっており、歴史事象としては元朝の外交使節であつた郝經が、賈似道の指示により幽閉された事件を指している。宋末元初の公論では、この事件が元朝の不興を買い、宋の滅亡を早めたと考えられていた（『錢塘遺事』卷四「拘留北使」、「宋史」卷四七四姦臣・賈似道傳等）。つまり語り手は、まくらで問いかけた王朝崩壊の「厲階」（第五句）として、丁大全と賈似道の姓を特に記しているのである。王朝崩壊が「丁揆」に始まり「賈禍」に成就するという見解が、當時の公論を承けていることに留意したい。

(d) 杜詩と宋末

正史の文體が時代の嗜好に合わせて古文・駢文に書き分けられるのに似て、「京口遣懷」詩の「文體」も當時の流行を反映している。

- 139 翠華渺焉之 翠華 渺として焉にか之かん
140 扶桑睇日浴 扶桑 日の浴するを睇み
141 魂斷曲江春 魂は斷たる 曲江の春

詩に語られた「現代史」（稻垣）

142 新蒲爲誰綠 新蒲 誰が爲にか綠なる

これは王朝の歸順後、南に逃れた二王の都落ちについて語った一節である。他の部分と異なつて抒情的な表現が並んでいるが、おおむね先人の詩句からの借用である。「翠華渺として焉にか之かん」は、白居易「長恨歌」の玄宗都落ちのくだり「翠華搖搖として行きて又た止まる、西に都門を出づること百餘里」を用いたもの。「魂は斷たる曲江の春、新蒲誰が爲にか綠なる」は、杜甫「哀江頭」「少陵の野老聲を吞みて哭す、春日潛行す曲江の曲。江頭の宮殿千門を鎖し、細柳新蒲誰が爲にか綠なる」を借用している。南宋期には江西詩派の「奪胎換骨」が流行するが、「京口遣懷」詩の文體にはそうした一時代の嗜好が明瞭に反映されている。

なかでも杜甫からの借用が多いのは、やはり當時の氣風であろう。杜詩の使用については、「奪胎換骨」よりもむしろ「集句」の技法に近い印象さえ受ける。たとえば襄陽陷落後の一節に、杜甫「雨」二首之二（『杜詩詳註』卷一五）および「南嶽に過りて洞庭に入る」詩（同卷三二）の

句を借りた、次のような一聯がある

061 連檣萬縷幢 檣を連ぬる萬の縷幢

062 悠悠自回舳 悠悠として自ら舳を回らす

これは天然の大壕である長江の突破に頭を悩ませてきた元軍が、襄陽の陷落を機に水軍を味方につけた様子を描寫したものである。同時代の文天祥に、杜甫の五言詩句を抽出し、それを繋ぎ合わせて作った『集杜詩』二百首がある。

そのうちの二聯と比較してほしい（『集杜詩』第九「京湖宣閫」、括弧内は原注）。

連檣荊州船（雨） 檣を連ぬ荊州の船

悠悠回赤壁（過南嶽入洞庭） 悠悠として赤壁を回る

兩者ともほぼ同一の句法であり、俞德鄰の一聯が集句詩的な發想によつて作られているのが分かるだろう。『集杜詩』は至元十七年（一二八〇）、文天祥「自序」識語の作であるから、句法の一致は偶然に過ぎない。俞德鄰にも「竹院逢僧（竹院に僧に逢う）を以て韻と爲して杜工部の句を集め鶴林老 別流禪師に贈る」四首（卷二）があるように、杜詩集句は當時の讀書人の間で流行した知的遊戲で

あつた。いま試みに「京口遣懷」詩と『集杜詩』双方に使

用される杜詩句を列擧すれば以下のとおりであり、杜甫の詩句に改變を加えずそのまま用いた例（◎を附けたもの）が二例ある（杜詩の原題は『集杜詩』原注に明記されるため省略）。

疾風捲黃屋（「京口遣懷」第二句）／黃屋朔風卷（『集杜詩』第二十二）

潰卒爭倒戈（第七十三句）／士卒終倒戟（第二十六）

◎水陸迷畏途（第九十一句）／水陸迷畏途（第十四）

至今用鉞地（第九十七句）／到今用鉞地（第六十八）

屈膝同所歸（第一百十九句）／逆節同所歸（第二十五）

◎元惡迷是似（第一百二十三句）／元惡迷是似（第十二）

故園莽丘墟（第一百三十七句）／故園莽丘墟（第三十四）

詩句の借用が、詩人としての技術の限界を示すのも事實であろう。だが、宋元交代期における杜詩の借用には、詩的技巧を離れた格別の意義があつたことを見逃してはならない。張戒『歲寒堂詩話』に代表されるごとく、當時忠君愛國の詩人として再讀されていた杜甫は、詩作のみならず士人としての模範でもあつた。^⑦ 文天祥は『集杜詩』自序で

「凡そ吾が意の言わんと欲する所の者、(杜)子美 先に爲に之を代言す」と述べている。これは熱烈な杜詩愛好の告白とも、集句の遊戲性を韜晦するための修辭とも解され、そのどちらも正しい。しかし、杜甫が忠臣を自認する文天祥の代辯者になり得るのは、まさしく杜詩に「忠節のうた」という付加價值があつたためではなからうか。こと宋元交代期のイデオロギーに關わる詩作において、杜詩は人口に膾炙するがゆえではなく、忠君愛國のうたであればこそ借用されるという一面があるのではないか。『集杜詩』は杜詩集句によつて宋末の大事を綴つた連作詩であり、詩によつて歴史を振り返る構想は「京口遺懷」詩に似ている。おそらく俞德鄰の心理の根底にも『集杜詩』自序と共通の意識がはたらいているだろう。宋末の士人が政治的理想を詩に表現するとき、通俗的ではあるが最も説得力を有した方法こそ、杜詩の模倣ないし借用であつたと言えるのではなからうか。

四 詩の創作意圖

さて、俞德鄰はいわゆる宋の遺民であり、張炤・劉宣は元の地方官僚であつた。遺民である俞德鄰が元朝の地方官と親しく交際し、「京口遺懷」詩をささげているのだから、この詩は宋の舊士大夫層が互いの感傷を癒すために作つた「遺民詩」ではない。それでは一體なぜ、このような長編詩を元朝の士人に讀ませる必要があつたのか。

(a) 記憶の喚起

「京口遺懷」詩は揚州をめぐる攻防戰について詳しく語っている。俞德鄰の住む鎮江は長江を挟んで揚州の對岸に位置しており、第一にこうした距離の近さが語りの密度に關係していると考えられる。

- | | | |
|-----|-------|---------------|
| 125 | 庭芝困廣陵 | 庭芝は廣陵に困しみ |
| 126 | 儲亡二年粟 | 儲へに二年の粟亡し |
| 127 | 力戰尙可支 | 力めて戰はば尙ほ支ふ可きも |
| 128 | 而乃事蝸縮 | 而乃ち蝸縮を事とす |

129 乙亥仲夏交 乙亥 仲夏の交

130 北向發一鏃 北に向ひて一鏃を發するも

131 死傷近七千 死傷 七千に近く

132 從此輟推轂 此れ從り推轂するを輟む

133 浮海未及桴 海に浮ばんとして未だ桴するに及ばざるに

134 委身飼蛇虺 身を飼へる蛇虺に委ぬ

135 姜才就菹醢 姜才 菹醢に就けば

136 淮城危破竹 淮城 危きこと破竹のごとし

(李庭芝は揚州の守備に苦戦したが、二年分の兵糧の備蓄すらない／奮戦すれば持ちこたえられたはずだが、こともあろうに殼を閉ざして籠城を決め込んだ／徳祐元年五月、北軍に一矢報いようと試みるも／死傷者は七千に近く、北軍はこれを境に自ら仕掛けるのを止めてしまふ／益王の南方政權の招きに應じようと まだ海に筏せぬうちに、子飼いのマムシに我が身を預ける／姜才が處刑されて鹽漬けになると、淮南の諸城はもはや竹を割るも同前のもろさ)

「乙亥仲夏の交」は本來、季夏六月とすべきところ。徳祐

元年五月、元軍の司令官・阿朮は揚子橋にバリケードを築き、宋軍の淮東方面の糧道を遮斷する。翌六月、揚州の都統であつた姜才は兵二萬を率いて揚子橋に夜襲をかけるが、大敗してその捕虜一萬八千人が斬首された(『元史』世祖紀五)。「死傷七千に近し」は、この楊子橋の敗戦をうたつてゐる。その後、阿朮は包圍網を敷いて持久戦に持ち込む(『宋史』卷四二一李庭芝傳、卷四五一姜才傳)。「儲へに二年の粟亡し」は、補給線を斷たれた揚州の窮狀をいう。宋の歸順後も揚州は降伏せず、徳祐二年七月、總司令官の李庭芝は陳宜中・張世傑の暫定政府に参加すべく、海路南を目指す。ところが留守に残した朱煥という者が、城を擧げて元軍に降伏してしまつた。追撃を受けた李庭芝と姜才は捕らえられ、ほかならぬ朱煥の建議によつて斬首される(李庭芝傳)。「身を飼へる蛇虺に委ぬ」は、柳宗元「捕蛇者説」を意識しつつ、部下に後弾を撃たれた李庭芝の不運をうたつてゐる。

注意したいのは、揚州攻略の總司令官であつた阿朮が、かつて兪德鄰に仕官を促した人物であり(前掲『至順鎮江

志)、また詩の受け手の一人である張炤が、本傳に「宋將李庭芝 城を棄てて泰州に通るるに、炤 兵を領めて揚州城下に迫り、躬ら往きて招諭す。制置朱煥 城を以て降り、庭芝も亦た擒に就く」とあるごとく、揚州陷落の中心人物であつたことだ。つまり揚州は、詩の書き手・受け手双方の生々しい記憶を喚起する土地であつた。

(b) 歴史敘述と隱逸宣言

詩の大部分を歴史敘述に費やした語り手は、むすびにおいて江南の一布衣という本來の姿に戻る。

- 183 老我亦何爲 老いたる我れ 亦た何をか爲さん
 184 窮途困羈束 途に窮まりて羈束に困しむ
 185 愁傷覺衰曳 愁傷して衰曳を覺え
 186 垢膩忘頽沐 垢膩たるも頽沐を忘る
 187 蟄跡笑桓鮠 跡を蟄しては桓鮠に笑はれ
 188 竊食愧飢驚 食を竊みては飢驚に愧づ

(老いばれの私に今さら何ができよう、八方塞がりて旅の空にあえいでいるというのに／あまりの感傷に衰弱した體

詩に語られた「現代史」(稻垣)

を曳きずるかのようで、垢じみても洗うことすら忘れてしまふ／足跡を隠しては淵に住む山椒魚から笑われ、わずかな糧を得ては腹をすかせたあひるに恥じ入る) この後、すでに引用した「安にか得ん董狐の輩の、直筆もて簡牘を濡らし、姦を誅して忠藎を録し、上は麟經と續くを」という良史への期待が述べられ、次のように詩はむしろすばれる。

- 193 海寓今一家 海寓 今一家
 194 貢賦均四隲 貢賦 四隲に均し
 195 化日滿窮閭 化日 窮閭に滿ち
 196 淳風變頽俗 淳風 頽俗を變ず
 197 餘生幸未化 餘生 幸ひに未だ化せずして
 198 刀劍易牛犢 刀劍もて牛犢に易ふ
 199 聊種邵平瓜 聊か種えん 邵平の瓜
 200 且植淵明菊 且く植えん 淵明の菊
- (四海は今や一つ屋根となり、朝貢・租税は四邊に均しく行われている／太平の日は貧しい巷にまで滿ち、恵みの風が亂れた風俗を一變した／幸いに残りの人生はまだ終わってお

らず、武器を持つ手を牛を曳く手に替える／＼とりあえず邵平のように瓜でも種まき、陶淵明のように菊でも植えて暮らそう。

「聊か種えん邵平の瓜、且く植えん淵明の菊」と締めくくられるむすびの隱逸宣言は、歴史敘述に徹してきた詩の展開から見ても唐突である。また、現在の窮狀を説き、隱逸への志向を述べるなかで、にわかに良史への期待が語られるのも理解しがたい。むすびにあらわれた歴史敘述と自己言及のちぐはぐな關係には、「京口遺懷」詩作成のふたつの意圖、すなわち宋末史の敘述という内的な欲求と、仕官の拒否という外的な用途が讀み取れる。

『至順鎮江志』には、阿朮による「行省郎中」への推舉を、俞德鄰が拒否したと記されていた。「行省郎中」といえば、至元十二年（德祐元年）當時の劉宣と同等の職である。推舉を斷つた後も友人の張炤・劉宣らが再三勸誘したであろうことは想像に難くない。「京口遺懷」詩が至元十六年の作であるならば、おりしも元朝による南方文人の登用が盛んな時期にあたる。『至順鎮江志』の「行大司農・

司江浙行省、累ねて薦むるも皆な起たず」とは、ほかならぬ友人たちの推舉だったかもしれない。

先に見たとおり、俞德鄰は揚州の抵抗戰について詳しく語ること、作者と讀者、双方の生々しい記憶を喚起している。そして、元朝に出仕した宋の舊臣を厳しく批判し、みずからも隱逸を宣言することで、出處進退に對する自己の態度を明確に示している。揚州陥落の立役者であつた張炤は、このような友人に對し、それ以上仕官を勧められたであろうか。俞德鄰が元朝の地方官に長編詩をささげた意圖はここにある。歴史敘述によつて讀者の「現代」の記憶を喚起し、自己の立場を明示することで、元朝への仕官を劃然と（ただし詩歌を用いることで婉曲に）拒否しているのである。

(c) 作者と語り手

先行する詩歌作品と「京口遺懷」詩とを分かつ最も大きな特徴は、自傳から距離を置き、歴史敘述に徹している點にある。しかし、むすびを除く歴史敘述のなかでただ一聯、

俞德鄰が宋末史の語り手としてではなく、私的個人として語りの表層に現れた箇所がある。

079 蹇予客朱方 蹇 予れ 朱方に客し

080 沈憂髮曲局 沈憂に髮は曲局たり

(ああ 私は丹陽に寓居し、沈憂のあまりざんばら髪)

これは賈似道の死について語り終えた直後の一聯で、「蹇」は「楚辭」に頻出する歎辭、「朱方」は作者俞德鄰の住む鎮江(現鎮江市丹徒區)の古名である。それまで宋末史の語り手に徹し、賈似道の榮華と没落について語り繼いできた俞德鄰は、一時代の終焉にあたつてにわかに歴史敘述を逸脱し、江南の一布衣として私的な經歷を差し挟んでいる。この一聯のあと、俞德鄰はふたたび宋末史の語り手に戻り、むすびにいたるまでその姿を現さない。

このような構成から立ち現れてくるのは、大きく渦巻く時代の潮流と、卑小な私との對比であろう。詩のなかで史臣に替つて權勢家に筆誅を下す私は、現實の同時代史にあつては郷貢進士のまま王朝の滅亡をむかえた一布衣に過ぎない。王朝最後の黄金期の終焉にあたつて卑小な「予

詩に語られた「現代史」(稻垣)

れ」を挿し挟んだのは、進士出身者として堂々と國政に參與できなかった現實の自己に、否應なしに引き戻されたためではなかったか。歴史敘述の龜裂からわずかに顔を覗かせる自己言及に、時代に乗り遅れた讀書人の自意識を読み取ることができる。元朝士人に向けた歴史語りは、實際にはみずから過ごした一時代を捉え直すための、自己に對する語り聞かせであつただろう。

五 おわりに

以上のごとく、俞德鄰「京口遣懷」詩は長編古詩の形式を用いて當時における「現代史」を敘述しており、敘事と歴史批評を兼ね備えたその形式は正史の筆法を多分に意識したものであつた。正史の文體が一時代の嗜好を反映するように、「京口遣懷」詩も南宋末の詩風を反映し、先人の詩句を多數借用するという特徴を持っている。詩の七割を占める歴史敘述から一轉、むすびにおいて俞德鄰は宋末史の語り手から現實の一布衣に戻り、隱逸への志向を述べている。歴史敘述と隱逸宣言という二重構造には、詩作のふ

たつの意圖、すなわち同時代を歴史として捉え直そうとする知的欲求と、元朝への出仕を劃然と拒否する實際的用途とが讀み取れる。

詩による歴史敘述の先行例として、「詩史」と評される杜詩がある——と言われるかも知れない。周知のごとく「詩史」の評語の最も早い例は、晩唐・孟棻『本事詩』高逸「杜は祿山の難に逢い、隴・蜀に流離し、^{こたへ}畢く詩に陳べ、見はるるを推して隠るるに至り、殆ど遺事無し、故に當時號して『詩史』と爲す」である。この記述から明らかにたとおり、後世の讀者は杜詩に「畢く詩に陳べ」る敘事性と、「推見至隱」つまり『春秋』に代表される微言大義の歴史批評性を見いだしている。『本事詩』の説のとおりであるならば、杜詩は本稿のいう、詩による歴史敘述そのものである。

たしかに杜詩は一種の記録性を有している。しかし、それを歴史敘述たらしめているのは他ならぬ讀者であること、我々は見落としがちである。杜詩の讀者には、すでに他の讀書人たちと共有された、唐代史のおぼろげなイメージ

がある。讀者は杜詩のなかに安史の亂前後の歴史事象を再發見し、それを史料として自己の唐代史イメージをより鮮明に描き直す。讀者による唐代史の語り直し、兪德鄰の歴史敘述と同様の過程をたどっていることに注意してほしい。語り直しという二次創作を経なければ、杜詩は「詩史」たり得ないのである。

註

- ① 「哀江南賦」「觀我生賦」が自傳的かつ同時代史的であると指摘した早い例として、興膳宏『望郷詩人 庾信——その詩と生涯』あとがき（中國の詩人四、東京、集英社、一九八三）、また兩賦を比較した專論に、土屋昌明「顔之推「觀我生賦」について——庾信「哀江南賦」との對比において——」（國學院大學大學院文學研究科紀要「二二」、一九九二）がある。

- ② 好川聰「韓愈の長編回想詩をめぐって——杜甫との比較から——」（『日本中國學會報』六八、二〇〇八）は、自傳文學を推し廣げた「長編回想詩」の視座から中唐までの詩人、杜甫・白居易・元稹・劉禹錫の「百韻詩」について觸れている。中唐以後では李商隱「行次西郊作「百韻」、皮日休「吳中苦雨因書「百韻寄魯望」、陸龜蒙「奉酬襲美先輩吳中苦雨「百

韻」韋莊「和鄭拾遺秋日感事一百韻」等があり、うち韋莊の詩は唐末の歴史事象をうたっているが、検証は今後の課題としたい。

③ 沿海制置使について、『宋史』職官志七（卷一六七）制置使の條に「又た沿海制置使有り、明州（慶元府、府廳は鄞縣、現浙江寧波）の守臣を以て之を領す」とある。ただし黃萬石の慶元府への差遣は史書に見えない。

④ 汪元量の選集收録が同様の傾向にある。拙稿「汪元量の『湖州歌』九十八首について」（『中國文學報』六七、二〇〇四）参照。

⑤ 作成年代比定の根據は次の通り。詩題において劉宣は「劉伯宣郎中」と呼稱されている。劉宣が行省郎中（從五品）から同知浙西宣慰司事（從三品）に移るのは宋朝が歸順した至元十三年であるが、詩本編には殘存政權の消滅が描かれているため、至元十六年二月以降の作でなければならない。また張炤は至元十六年五月、辭職して故郷に戻る。詩題には諸友に「寄す」ではなく「呈す」とあるから、張炤を含む詩の受け手は俞德鄰の近邊にいたと思われる。もっとも「呈」は獻呈するという行為に重心があり、「寄」は手紙で寄越すという手段に重心があるので、これだけでは所在を確定できないが、受け手がすでに鎮江を離れていたならばやはり「寄す」としたであろう。以上より、詩の作成年代は至元十六年、劉宣が同知浙西宣慰司事、張炤が鎮江府總管府達魯花赤の任にあつ

詩に語られた「現代史」（稻垣）

た頃に比定できる。張炤が辭職後しばらく鎮江に滞在していたとすれば、作成時期は同年五月よりも若干遅れる。

⑥ 村上哲見「貳臣と遺民——宋末元初江南文人の亡國體驗——」（『中國文人論』所收、汲古選書二二、東京、汲古書院、一九九四）は、後世「遺民」と稱される讀書人が元朝に出仕した「貳臣」と交際する例を紹介し、「貳臣の思想」が謝枋得・鄭思肖ら一部の特別な人々のものであり、多くは道學の徒であつたと指摘する。

⑦ 杜詩と忠君愛國の關係については、許總『杜詩學發微』（南京、南京出版社、一九八九）内篇第三章「論宋學對杜詩的曲解和誤解」第二節に詳しい。邦譯『杜甫論の新構想——受容史の視座から』第三章「宋學における杜詩論」第二節「杜詩の忠君愛國の強調と『詩聖』の評價」（加藤國安譯、東京、研文出版、一九九六）。

〔表〕「京口遺懷」詩の歴史叙述（正史・筆記の記載は、便宜のため一部字句の省略と元號・人名の補記を行っている）

第一段 賈似道の抬頭（007—032）

西曆／月	歴史事象（該當句）	詩句	正史（一部筆記）の記載
	丁大全に對する譴責 (007、008)	穆陵握乾符、丁揆覆鼎鍊	〔宋史〕瀛國公紀：德祐元年（一二七五）六月丙午、王應麟言、開慶之禍、始於丁大全。
一二五九・九	鄂州の役（009—012）	北兵渡許黃、沔鄂盛誼譴	理宗紀四：開慶元年九月壬子、賈似道表言、大元自黃州沙武口渡江、中外震動。
一二五九・九	雲南方面からの挾撃 (011、012)	漣海蕩爲墟、交廣駭幹腹	〔錢塘遺事〕四「北兵渡江」：開慶己未秋九月、北朝憲宗皇帝視率大軍入蜀、勢欲順流東下、一軍自大理因幹腹南來、歷邕桂之境、以至靜江府。
一二五九・一〇	吳潛の起用（015—018）	明詔起臣潛、扶顛秉鈞軸	〔宋史〕理宗紀四：開慶元年十月壬申、以吳潛爲左丞相兼樞密史。賈似道爲右丞相兼樞密使。十二月己亥朔、賈似道言鄂州圍解。辛亥、詔改來年爲景定元年。
一二五九・一〇	賈似道の起用と鄂州包圍の解消（019—028）	遯歸持相印、景定實初卜	
凱旋			

第二段 賈似道の榮華と没落（033—080）

賈似道の榮華	一二六四・一〇 一一一	度宗の即位（033、034）	哀哀杞天崩、度皇繼歷服	（略）
	一二七〇・六一	周公に比される賈似道 (035—038)	定策比周召、卜世過邨鄒	度宗紀：咸淳六年六月、上曰師相而不名。又賈似道傳：度宗稱之曰師臣而不名、朝臣皆稱爲周公。
	一二六二・三一	集芳園の繁榮（039—042）	金屋貯娉婷、羽觴醉醺醺	理宗紀五：景定三年正月庚午、賜賈似道第宅于集芳園。

權 陳宜中政		賈似道の 沒落				化 戰局の惡			
一二七六・一	張世傑・蘇劉義・劉師	一二七五・九	賈似道の死 (077、078)	一二七五・二	賈似道の敗走 (075、076)	一二七三・六	辯護される降伏將軍の一族 (057、058)	一二七三・三	機速房の設置 (053、054)
一二七五・三	陳宜中の起用 (081、082)	一二七四・一二	孫虎臣が大將に (069、070)	一二七五・二	賈似道の出師 (067、068)	一二七四・一二	陽邏堡の役 (063、064)	一二七三・一	樊城・襄陽の陥落 (051、052)
奈何張蘇劉、猜忌不相睦	謹傳用宜中、厦仆支一木	觸熱赴清漳、就死何穀穀	單騎竄惟揚、走險甚奔鹿	丁洲帥前鋒、未戰兵已鉗	蒼黃出視師、氛埃昧前羣	老夏亦遁逃、竟學龜藏六	含垢護逆儔、況望誅馬謖	折衝亦何爲、籌邊置機速	一朝襄樊破、殺氣薄川谷
瀛國公紀：德祐元年三月丙子、以陳宜中爲特進、右丞相兼樞密使。	（第三段「二王の都落ち」参照）	瀛國公紀：德祐元年九月丙戌、會稽縣尉鄭虎臣部送似道の貶所、至漳州殺之。	瀛國公紀：德祐元年二月庚申、虎臣與大元兵戰于丁家洲、敗績、奔魯港。夏貴不戰而去。似道、虎臣、以單舸奔揚州。	瀛國公紀：咸淳十年十二月癸亥、詔似道都督諸路軍馬、以步軍指揮使孫虎臣總統諸軍。	瀛國公紀：德祐元年正月戊子、似道出師。	瀛國公紀：咸淳十年十二月丙辰、大元兵復攻夏貴于陽邏堡。貴敗、沿江縱兵大掠、歸廬州。	度宗紀：咸淳九年六月、呂文福言文煥爲人扶擁、以襄陽降非由己心。詔文福勉力捍禦、毋墜家聲。	度宗紀：咸淳九年三月壬午、詔建機速房、以革樞密院漏泄兵事、稽違邊報之弊。	度宗紀：咸淳九年正月乙丑、樊城破。二月庚戌、呂文煥以襄陽府歸大元。

第三段 宋朝の降伏 (181—124)

詩に語られた「現代史」(稻垣)

突破される要衝		歸順	
一二七六・一	部隊の横暴（085、086）	勇らに兵權（083、084）	『元史』世祖紀六：至元十三年正月丙戌、時宋三司衛兵白晝殺人、張世傑部曲尤橫閭里。
一二七五・七	焦山の役（089—092）	焦門集戰艦、乾坤一擲足	『宋史』瀛國公紀：德祐元年七月辛未、張世傑諸軍戰焦山下、敗績。
一二七五・一〇	五牧の役（093—096）	區區拒毗陵、曾不事版築	瀛國公紀：德祐元年十月癸亥、張全・尹玉・麻士龍援常州、士龍戰虞橋死、全奔五牧。甲子、尹玉戰五牧死之、張全不戰遁。
一二七五	各地の潰走（097—100）	蘇秀暨湖杭、死生猶轉燭	（略）
一二七五／一一	獨松關の役（101—104）	獨松守張濡、兒戲鬪蟹觶	瀛國公紀：德祐元年十一月丁亥、獨松關告急。己丑、獨松關破。張濡遁、鄰邑望風皆遁。
一二七六・一	郝經の幽閉と賈似道に對する譴責（105—108）	信使詭成禽、賈禍幾覆族	『宋史』理宗紀五：景定二年（一二六一）九月乙亥、大元使郝經久留眞州。經之留、謀出賈似道。
一二七六・一	阜亭山の降伏交渉（109、110）	疑丞詣高亭、獻璽願臣屬	『宋史』瀛國公紀：德祐二年正月甲申、大元兵至阜亭山、遣監察御史楊應奎、上傳國璽降。
一二七六・二	宋朝の歸順（111、112）	黼屨釋冕旒、羽衛撤弓韞	瀛國公紀：德祐二年二月辛丑、率百官拜表祥曦殿、詔諭郡縣使降。
一二七六・一	二王の都落ち（113、114）	廣益亟南奔、窮荒尋帝儻	『元史』世祖紀六：至元十三年正月乙酉、來報、陳宜中・張世傑・蘇劉義・劉師勇等挾益・廣二王出嘉會門渡浙江遁去。
一二七六・三	理宗妃謝太后の處遇（115、116）	煢然太母身、垂老歌黃鵠	世祖紀六：至元十三年三月丁丑、阿塔海・阿剌罕・董文炳詣宋主宮、趣宋主熈同太后入覲。子母皆肩輿出宮、唯太皇太后謝氏以疾留。

二二七六・二	元朝に出仕した舊臣 (117—124)	彼哉寧馨兒、乘桴叨爵祿	(略)
--------	------------------------	-------------	-----

第四段 殘存勢力による抵抗戰 (125—154)

揚州				揚州			
二二七五・五—	揚州包圍網 (125—128)	庭芝困廣陵、儲亡二年粟	世祖紀五：至元十二年五月丁丑、阿朮立木柵于揚子橋、斷淮東糧道、且爲瓜洲藩蔽。	二二七六・七	揚州の降伏 (133、134)	浮海未及桴、委身螻蛄虺	『宋史』李庭芝傳：至元十三年七月、益王遣使以少保左丞相召庭芝。庭芝以朱煥守揚、與姜才將兵七千人東入海、至泰州、阿朮將兵追圍之。
二二七五・六	揚子橋の役 (129—132)	乙亥仲夏交、北向發一鏃	世祖紀五：至元十二年六月丙寅、宋揚州都統姜才、乘夜攻揚子橋木柵。阿朮麾步騎並進、大敗之。	二二七六・八	部將姜才の死 (135、136)	姜才就菹醢、淮城危破竹	『元史』世祖紀六：至元十三年八月乙亥、斬宋淮東制置使李庭芝・都統姜才于揚州市。
二二七六・一—	南へ逃れる二王 (139—142)	翠華渺焉之、扶桑睇日浴	『第三段「二王の都落ち」參照』	二二七九・一—	厓山の役 (143—146)	南紀訖朱厓、一戰絕遺躅	『宋史』二王紀：至元十六年正月壬戌、張弘範兵至厓山。二月癸未、陸秀夫負髻投海中。宋遂亡。
二二七八・一二	文天祥の捕縛 (147、148)	旋聞俘文相、繫頸繫燕獄	二王紀：至元十五年十二月壬寅、文天祥被執于五坡嶺。	二二七九・二	陸秀夫の入水 (149、150)	又聞陸元樞、抗節死彌篤	(第四段「厓山の役と殘存政權の消滅」參照)

第五段 宋朝政治史の概括 (155—182)

太祖と王朝黎明期 (155—158)	恭惟五季間、永昌應符錄
宋朝の文治政治 (159、160)	文子繼文孫、三才歸位育
靖康の變 (161、162)	中更靖康禍、流血灑川濱
南渡と高宗の即位 (163、164)	光堯躬再造、艱苦蕪羹粥
孝宗の即位 (165、166)	淳熙受內禪、德盛仁亦熟
寧宗・理宗・度宗朝の小康 (167—172)	寧理度丕承、膏澤多滲漉
奸臣に對する譴責 (173—176)	向非彼權臣、玉食擅威福
滅亡後の現状 (177—182)	淒涼數載間、王侯乏半菽

(略)